
【Steins ; Gate】 永久不変のアフェクション 二次創作

じじい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【Steins;Gate】 永久不変のアフェクション 二次創作

【Nコード】

N1955Z

【作者名】

じじい

【あらすじ】

岡部倫太郎は、あの3週間を乗り越え平穏な毎日を送っていた。当たり前とは言い難い普通の日常、他人から見たら価値のない日常かもしれないが、岡部倫太郎自身はそんな日常を心の底から喜び、何も起こらない日常を歓迎していた。だがそんなある日、街中で不思議な出会いをする。

運命の出会い？（前書き）

シユタインズ・ゲート到達後のお話し。アニメ・ルパン三世で使われたネタを使っています。やりたい放題書いてるので、ツッコミどころ満載です。

運命の出会い？

時空間の迷子

「俺だ、どうやら機関の罫に嵌まったようだ。いや助けはいらない、これは1人で何とか出来る範囲だ。これも予想していたケースの1つ。なに、この俺にかかれれば造作も無いことだ。しかし、マッド・サイエンティストとあるう者が愚かにも他人の手の平で踊らされるとはな…、俺も落ちたものだ…ああだがしかし俺の野望はこんな所で終わるようなものでh」

「はいはい分かったから、ささっとして行ってこい！私プリンだからね」

「僕はゼロカロリーコーラよろー」

「まゆしいはジューシーからあげNo1!」

「…はあ、俺が負けるとは…」

ここはラボ、日夜未来ガジェットの開発が行われている場所である。そんなラボの長でもある俺が、何故パシリの様に買い物に行かされようとしているのかと言うと、買い物に行く者のを決めるじゃんけんに負けたからである。チョコキを出せばよかった…。

「あ…助手はプリン、ダルはゼロコーラ、まゆりはジューシー唐揚げ、だな行ってくる」

「行ってらしゃーい」

「寄り道しないで早く買って帰ってきなさいよ」

「ツンデレ乙！」

「誰がツンデレだ！ていうか橋田、ここでエロゲするなとあれほど…」

バタン

（賑やかだな…これもあの3週間があればこそか…）

あの3週間からもう1年ほど時間が経っている、今日は2011年7月21日、去年のこの日は紅莉栖と出会い、あの永かった3週間を過ごすこととなった。今は紅莉栖がアメリカから夏季休暇でこちに来ているため、あの3週間と同じような状況になっている。変わった事と言えば1年がたったため、皆進級している事ぐらいだ。

1年前の事を思い出しつつコンビニへと足を進める。

「暑い…じゃんけんに負けただけでこんな灼熱地獄を味わうことになるとは…」スタスタ

「！？」

「何だ？事件か？」

前方を見るとお巡りさんに話しかけられている子供がいた、どうやら迷子のようだ。迷子の子は泣いている。お巡りさんが分かりやすいほどの困った顔をしている、おそらく質問しても泣くばかりで答えられないのだろう。お巡りさんも大変だな。

（俺がしてやれる事はないな…）

そう思いコンビニへと向かう。迷子とお巡りさんの横を通り過ぎようとしたその時、ふと迷子の子と目が合った。どうやら女の子のようだ。

（こんな小さい子から目を離すとは…親は危機管理がなってないな

〈数時間後〉ラボ

「………」ポカーン

「ただいま……」

「……」（オカリンの後ろに隠れてる）

「あ……ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

おれたちはオカリンにコンビニにお使いを頼んだら子供を連れて帰ってきた、何をry」

「岡部……その子は……？」

「絢ちゃんじゃないよねー？どこの子かなー？」

「………」

「……ダキ

「岡部なんとか言いなさいよ、それとプリンは？」

「牧瀬氏、この状況でプリンの安否確認をするとは……」

「あ、そうそうジューシー唐揚げNo1はー？」

「いや2人とも！そんな事はどうでもいいっしょ！とにかく、今の状況を整理すべき！」

「……どうしてこうなった……」

「……ギューー

〈数時間前〉 道の真ん中

「落ち着け！落ち着くんた俺！これは……そう！夢だ！夢なんだ！そうかー夢かー夢ならしょうがないなー、夢なら覚めるよなー、おか

しいなーほっぺたつねっても痛いぞ？」

「えっぐ…パパどこいったの…えっぐ」ポロポロ
……………」

(待て、これは機関の陰謀だ！きっとそうだ！そうに違いない！そもそも『パパ』だと！？)

『ダディ』や『ファザー』のアレか？つまり日本語に訳すと『お父さん』『父親』ということか！？だが待て！待つんだジョー！！俺に子供はいない！というか俺は童 だ！子供なぞいる訳ないのだ！そうか、そうだよ。きっと人違いだ、いや人違い以外なにあると言っただけだ！！何を慌てていたのだ！やましいことなぞ何も無いではないか！なに、少しビツクリしただけだ、不意打ちくらっただけだ。なにも焦ることはない)【この間実に2秒】

「…えーと、少女よ」

「…？」

迷子の少女はこっちを見上げ、涙を目にいっぱいにして俺を見つめている。

「お父さんやお母さんはどこにいるのだ？」

「…？」

少女は首を傾げた、俺の質問が不思議だったのだろうか。だがしだいに少女はゆっくりと腕を動かし俺を指差した。

「…」ズーン

「…」ゴシゴシ

クル「…」

後ろに振り返っても俺の後ろには通り過ぎていく人だけ。

クル」……」

前に向き直っても少女は俺を指差している。

「……………ゴホン」

「パパ？」ズズー

どうやら言っている言葉の意味が通じてないようだ、見たところ4〜5歳といったところか、だがその歳ならこれくらいの質問には難なく答えられるはずだが……。

「あゝ、うん……えーと……、今日はお父さんとお母さんどっちと出かけんだ？」

「……うーん」

少女は急に困った顔して考え始めた。

「分から……ない」

「……ズーン」

これは一体どうしたものか……。

「では迷子になる前はどこにいたのだ？」

「うーん……」

「分から……ない」

「……ズーン」

(どうしたものか、交番に連れて行こうか、だがさっきお巡りさんに勘違いされたままこの子を押し付けられたし、いや押し付けられたというか、父親と勘違いすれば当たり前か。

いやでも勘違いするなよ、これって結構重大なミスじゃないか？ いやでも「パパ」と思いつきり抱きつきに行ったのならその人が父親だと思っよな、普通)【この間実に10秒】

「パパーお腹すいたー」グイグイ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「少女よ、お前のパパは本当に俺か？パパの名前を言ってみろ」

「……おかべ……りんたろう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「え？」

（何で知っているんだ俺の名前を！？俺は名乗ったか！？いやまだ名乗ってはいないはず、名札なぞ付けていないぞ、もしかしてその顔に書いてあるのか！？いやそんなマンガみたいなオチ現実にある訳ない。では何故見ず知らずの少女が俺の名を知っている！？ああそうか、そうなのか、俺が有名すぎてもはや名前を知らぬ者はいないのだ。きつとそうだそうに違いはない、それじゃー名前を知っているても不思議じゃないなー）【この間実に2秒】

「すいませーん、私の名前を知っていますかー？」ニコニコ あははー

「え、いや、知りません……」サササー

見知らぬ人に声をかけ、俺の名前を聞いてみたらドン引きされた上にすごいスピードで離れて行ってしまった。

「パパーどうしたのー？」

少女が近寄ってくる。

「……」

「パパ？」

「少女よ俺はお前のパパではないぞ？」

「え…パパ？」

「いや、だから俺はお前のパパではない、お前のパパに似ていようとも俺はお前のパパとは違うんだ」

「…」ポロポロ

「あ…」

「パパ、わたしのこときらいなの？わたしはいらぬいななの？」ポロポロ

「待て、泣くな！分かった！分かったから！」

「えっぐ、えっぐ…うええええん！」ダバダバ

少女の目から滝のように涙が流れ出した。

「あ、え、あ…」【パニック状態】

「エーンエーン！」ダバー

「「あらあら どうしたのかしら 兄弟ケンカ？ ほっときなさい」

周りからの目線とヒソヒソ声に俺のガラス細工のハートが碎けそう
だ。

「え、えーとえーと」あたふたあたふた【パニック状態】

「えーん、えーん」ダバー

「分かった！分かったから！俺が悪かった！」

「えーん、えーん」ダバー

「パパが悪かった！冗談で言ったんだ！お前はパパの子だ！」

「…」ピタ

迷子の少女はピタっと泣き止んで目を擦りながらこっちを見ている。

「えつぐ、えつぐ…本当？」

「本当だ！パパが悪かった！謝る！」

「パパー」グス

「な、なんだ？」

「お腹へったー」グ

「…分かった、何が食べたい？」

「ハンバーグ…」グス…

「分かった…それじゃ付いてきなさい」

「パパー」うん「ニギー

少女は泣き止み俺の手を握って俺に付いてきた。

（どうしてこうなった、なにがいけなかった、どこを間違えた、これからどうしようかry）

「…」ニコニコ

ハンバーグが食べれると知って迷子の少女は機嫌がよくなった、（もしかしてあの涙は演技だったのか…？）そんな事を考えつつ俺は迷子の少女を連れ行きつけの店に向かうことにした。

（行きつけの店）

「お帰りニヤさいませ！ご主人様！何名様ですか？」

「2人だ」

「分かりました！2名様ご案内ニヤいしまーす！」

「パパ あのおねーさんねこのみみついてるー」

「そうだなー」
行きつけの店といえはけやっぱりこの店になる、サンボもいいが
そこは牛丼屋だしな。

「ご注文はお決まりですか？」

「ハンバーグ…」キラキラ

「ハンバーグ1つとコーヒー1つ」

「分かりました」

「…」キヨロキヨロ

「珍しいか？」

「…」コクン

「そうか…」フフ

(…って「フフ…」じゃないだろ！どうして迷子の見ず知らずの少女とメイクインにゃんにゃんに来ているのだ！？これってモはや誘拐罪が適用される状況じゃないのか！？いやしかし！俺はこの少女のパパ！…あれ？パパだっけ、ああーパパならしょうがないなー『パパ』なら…って違う！俺はパパではない！俺は童 だ！子供なぞいるはずがない！そもそもなぜ見ず知らずの子供が俺の名前を知っている『パパ』と呼び、こうホイホイ付いてくるのだ！？近頃の子供は皆こんな感じなのか！？いやそんなわk)

「凶真」

「フエ、フエイリス」

「ねこさんだ」(小声)パチクリ

「お帰りなさいませだニヤ、今日は小さいご主人さまと一緒にニヤ
ー？」

「あーうん、そうだな…」

「…」パチクリ

「この子はどこの子かニヤ？」

「あーうん…この子はだな…」

「パパーいまこのおねえさんのみみうごいたー」

「パ…パ…？」ジリ

「フェ、フェイリス？これはだな…話せば長くなるのだが…」
「…？」

（説明）

「そ、そういう事なのかニヤ…、でも流石に無理があるニヤ…」

「いやこれ全部本当の事だからな？嘘偽り、脚色いつさいしていないぞ？」

「おいし〜」もぐもぐ ニコニコ

（どつやら嘘は言っていないみたいなのニヤ、だとしてもこんな事
つて…）ジー

「フェ、フェイリス？」（汗）

「たまねぎいやー」カチャカチャ

「…この子の名前、なんて言うかのニヤ？」

「そう言えば聞いてなかったな…なあ迷子少女よ、お前の名前はな
んと言うのだ？」

「ふえ？なまえ？パパ…わたしのなまえわすれちゃったの…？」う
るうる

「いや、いや違うぞ！これは…その…訓練だ！ちゃんと自分の名前
が言えるかどうかお前を試してるんだ！」

「…ゴツゴツ」

「それで、あなたのお名前はなんていうのかニャ？」ニゴリ

「…おかへ…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1955z/>

【Steins ; Gate】 永久不変のアフェクション 二次創作

2011年12月18日00時49分発行